高校生が思い描く津別町の未来

自分の生活している町を考える

平子 裕 教諭

当たり前の中にある津別の魅力を大学生が気づかせてくれる

令和2年度から高大連携事業を担当している平子裕教諭は、HALCCと津別高校をつなぎ、生徒の成長のためさまざまなカリキュラムを仕掛けている。津別の自然や産業、行政などあらゆる事柄について学びつつ、課題を探る津別高校独自の授業「つべつ学」。1年生からスタートし、3年間にわたり津別を学ぶ中、2年生の授業「つべつ学Ⅱ」では大学生と共に課題解決を考える。

「まちのことを考えるときに大学生が津別町の人ではないので、生徒たちにとっては当たり前のことを新鮮に驚いてくれる。生徒たちにとってもいろんな気づきがあり、まちを見る力が身に付いてきています」と平子教諭は語る。

これまでの実績を踏まえて学校もHALCCは必要な存在となっている。生徒たちが大学生と接する機会がほとんどない中で、北大生と関われる高大連携事業は貴重な時間だ。「グループワークなど、我々教員ができないことを生徒と近い距離感で一緒にやってくれる。年の近い大学生だからこそ生徒も発言がしやすくなっています」

HALCCと関わる中で高校生の考え方にも変化が見られ、平子教諭は「生徒全員が一年生の頃とは見違えるほど変わった」という。津別に足りないものを発見し、一歩踏み込んだ視点で解決策を見出す『鋭い嗅覚』が高大連携事業を通して身に付いた。

「現在、HALCCとの関わりが2年生だけなので、もったいないと感じます。今後は1年生から3年生まで大学生とまちについて考えることができれば、今以上に高校生が主体となってまちの活性化の一助になると思っています」

若い人が行ける場所を増やしてにぎやかな町に

柏葉 幸音さん

『にぎやかになる津別町』をテーマにまちの魅力発信について1年間取り組んできた柏葉幸音さん（津高2年生）。町内で若い人が集まる場所が少ないことに注目し、自分なりの解決策を探ってきた。

まちの知名度が低いこと、若い人たちが訪れる場が無いことを課題として挙げ、他の市町村から解決の糸口を見つけ出す。若者が集まる場としてカフェが重要だと考えた。「高校の近くにカフェを作り、学割で安く利用できるようにします」

また、まちの知名度アップのために津別高校の看板を作り直す案を挙げた。「現在の高校の看板はボロボロです。新しくすることで旅行などで津別を通った人が高校のことを知るきっかけになると思います」

2つの解決策を提案したがそこに至るまでには、HALCCの存在が大きかった。「自分のアイデアを膨らませてくれるヒントをもらいました。自分たちに合う意見に的確な助言をしてくれます」

柏葉さんは、HALCCとともにつべつマルシェに参加し、高大連携事業とは別の場でも大学生と交流を深めている。「特産品が売れるのかなという心配もありましたし、呼び込みが大変でした。大学生からさまざまなアドバイスをもらい、自分なりに津別や特産品の良さをアピールしました。2日間と短くも貴重な体験ができました」

HALCCと触れ合うことで全体を見渡す視点を持つようになったのも、新しい発見だ。

林業を盛り上げたくさんの人が木に興味を持つ

蒲生 優斗さん

『これからの津別の林業について』をテーマにまちの林業を1年間調べてきた蒲生優斗さん（津高2年生）。父が町内の木材会社で働いていることもあり、まちの林業について探究してきた。

「私が思い描く理想の津別は、林業がより盛んになることで木の特産品をもっと認知してもらうこと、また、環境問題の対策に貢献できるまちづくりです」

この理想の背景には、木の特産品が町外に浸透していないことや木質バイオマスの取り組みが町民にあまり認知されていないことなどの課題がある。理想実現のため、林業に興味を持ってもらうことが必要と考えた。「木を使ったイベントを増やしてまちの人に林業を考えてもらう。多くの人に木の魅力に気付いてもらいたい」

また、林業が盛んな他市町村と意見交換する場を増やして、それぞれの現状や成功例などを共有することが課題解決の一歩になると提案した。

高大連携事業で得た経験が今後、蒲生さんの人生に活かされる。「自分から積極的にHALCCと関わるようにしていました。大学生がさまざまな手法を駆使してくれたおかげで津別の林業を深掘することができました」

HALCCとは年齢が近いからこそ話せることもあり、今後の進路についても相談してきた。

「高大連携事業がとても楽しいです。北大生と関わって何かをする機会は他の学校にはないので、津別高校ならではの強みだと思っています」